

にぎりばさみとX年のつき合い

岡田恵子

机のひき出しに一丁のにぎりばさみが入っている。さし渡し十二種。何時頃から私

の手許にあるのか記憶に残っていない。三度身辺整理をして勤務園を移動したが、特に大切に扱ったわけでもないのに、手許から離れないで残っている。

ある幼稚園では、

「先生とのはさみ、イメージがあわない」

次の幼稚園では、

「舌切り雀のおばあさんだね」

はさみを使っている私をみて、若い職員

から言われたことばである。にぎりばさみは、それ程珍らしくなったかと思う。

今までに何丁のはさみを用意したことか。その度に、目立つ印をつけたり、名前を彫ったり、そのつど、

「このはさみ 私のため使ったら戻してください」

と全職員に宣言もするのだが、すぐなくなる。はさみにはそんな性質もあるのかと考えているが、このにぎりばさみとは不思議に長いつき合いになってしまった。大分

前、捨てようかと思ったが、今は愛着が出てしまった。

おもいで ―その一―

このはさみも大いに活躍した時がある。

四角・三角・長四角と重ね折りの色紙で模様切りをした。子どものはさみでは細かい細工が出来ない。折り目ぎりぎりの線まで切りとるのは、刃先がよく切れるにぎりばさみがよい。子どもの目の前で切りとり、

やおら広げてみせた時の驚き・感嘆、まるで手品をみせている感じだ。出来た作品をガラス戸や壁に貼る。特に冬は、戸外の雪をバックにしてガラス戸や窓に花が咲いたようになる。このような事を通して他の組の子とも仲よしになった記憶がある。

最近、家庭も含めて模様切りに類したものがみられなくなった。どこかに、何らかの形で生かせるような気がする。

おもいで — その二 —

四歳児を受けもっていた時、ようやくはさみの使い方に馴れた子どもが、切る面白さに勢いついて床やさんごっこをはじめたらしい。降園時刻が近づき保育室に戻ってみると、五・六名の子ども達が何やら賑やかに騒いでいた。よくみると髪が不揃いになっている。誰がはじめたのか、お互いに切り合ったのか、お母さんに叱られるのも

気づかない様子。そのまま帰宅させるには余りチグハグなので、原因を確かめる時間もないまま手当をする。その時にもぎりばさみを使ったように思う。

陽の当る窓ぎわに椅子をならべ、得意そうに腰かけていた子ども達の表情を想い、そろそろ社会人になる頃だろうと考えるとほほえましくなってくる。

最近、幼稚園に来る年齢になると、はさみの使い方に抵抗がないようだ。

- ・切り紙をするとうき出ず
- ・切るのでなく、もぎとってしまう
- ・はさみを横にするので、折り目丈く

こんな状態を見せる子どもが組に何名かいたものだが、はさみを使えない子の話題は職員室で耳にしなくなった。

家庭での遊びも、切ったり、描いたり、ブロックやプラモデル等、多様化している

が、手先を使うことが多いように感ずる。その反面全身を使う遊びに欠けている面が気になる。

この間も机のひき出しをあけたまま仕事をしていると、女の子が二、三人入ってきた。

「園長先生 これなあに」

「はさみでしょう 小さい家にある」

にぎりばさみを見つけて珍らしそうにみたり、さわったりしていた。

今度色紙を用意しておき、子ども達が遊びに来た時、模様切りでもしてみせようか。今の子どもはどんな様子をみせるだろう。このにぎりばさみは、まだまだ、私と子どもの間をつないでくれそうだ。

(函館市立函館幼稚園)